

# ポストドク問題に関する個人的な意見

中村康二 (総研大研究生)

今回、NPO法人学術研究ネットのセミナーに呼んでいただきありがとうございました。

この学術研究ネットというNPO法人は、「ポストドク問題」と問題の解決へ少しでも貢献すべく、「せめて、学会等で研究成果を発表する際の身分だけでも用意できないか」という発想から発足された法人であると聞きました。学位取得以降の身分の確保や自分の研究環境の確保というものは、個人の力ではかなり解決困難な問題であります。このことはこの文章の末尾に記した私自身の経歴による経験からも痛切に感じたものであります。そのため、この趣旨には賛同できます。しかし、この趣旨の実現のため、具体的にはどのような活動をすれば有効的かということが問題になると思います。おそらくそのためだと察しておりますが、今後の学術研究ネットの活動の参考のために、「ポストドク問題」に対する意見を書いて欲しいのと依頼が有りました。そこで、個人的な意見をここで書かせていただくことにします。

この文章を執筆するにあたり、貴法人の「定款」を拝見いたしました。それによると、この法人の目的は「高度かつ豊富な科学知識を持った研究・教育経験者と有能な若い研究者の協力により、不特定多数の市民を対象とする科学教育・啓蒙事業および人間と自然との…を通して、公益の増進に寄与すること」とありました。この文面と、前述の「身分問題」がどのように繋がるのかは明確ではありませんが、おそらく、「科学教育・啓蒙活動に若い研究者を参加させることで、世代間の交流を計ろう」という趣旨であると察します。世代間交流を促進し、若い研究者にチャンスを与えることで、少しでも「ポストドク問題」へ貢献しようというものだと思います。

さて、ポストドク問題とは、博士の学位を有している多くの研究者が、優秀な業績を上げているにもかかわらず、職に就けない状態にあることを問題にするものです。この問題は昔から問題にされていることであると、多くの先輩から耳にします。「今では有名になった〇〇大学の××教授はポストドクの期間が長く苦労していた」という話はよく耳にするものです。つまり、この問題は、長年議論されてきているにもかかわらず、「本質的な部分は何も解決されていない問題」であ

ると言えます。その一方で、当時の社会情勢や政府の打ち出す政策を反映して、この問題の状況や言い回しが、少しずつ変わっているのも事実です。末尾に記したように、私の所属研究機関に関する経歴はそれほど華々しいものではありません。ここでは、私の経歴から実際に見聞きできた内容をもとに、私個人の感想を記すことにします。

さて、私のように、研究職にしがみついている人間にとって、「ポストク問題」は重要な問題です。しかし、最初に強調しておかなければならないことは、「ポストクとして研究職にしがみついている人間は、この就職難の状況に対して、それなりの覚悟を既にしてている」ということです。研究者の業界が「ポストク問題」という問題を抱えており、就職がかなり困難であるということは、長年この問題が「問題」として取り上げられていることから、周知の事実として各個人了承しているからです。また、その一方、この就職難の状況下で幸運にも職を得た人は、そのことを十分理解し、その幸運に恥じないように、研究教育に十分に従事しなければならないと思います。それができないようであれば、自ら辞職し若い人材にその職を譲るべきだと思います。先の保証のない研究職を目指す事を選んだ時点で、これは既に周知のことであると思います。

また、貴法人発足における最初の発想：「身分だけでも与える」ということは、幾つかの大学で教官の個人的な裁量によって既に行われています。それが研究生という形を取るか、あるいは、どこかの非常勤講師という一時的な職を紹介してある程度の収入と身分を与えるかは、それぞれです。ここで注意しておきたいことは、やみくもに身分を与えることがいい事なのかは別問題であるということです。身分を与えられたからといって、研究が実際に継続でき、論文を書き続けることが出来るかは別問題です。生活のための収入を得るためには仕事をしなければならないし、そのため、研究時間が削られるというリスクはあります。また、例えば数年、身分を与えられ、論文をある程度書いていたからといって、就職できる保障は何もありません。また、就職が研究者としての最後のゴールではないという事実を認識すべきです。研究職でありながら、就職した後、10年近く論文を書いていない人物は、下から見れば無駄な人材としか写りません。このように、「身分を与える」には、本人にはそれなりの覚悟はいるし、周囲もその事実を本人に十二分に認識させるべきですし、さらに身分を与える側もその人にもっともらしい意見を言うためには、それなりのことを実際にやっている必要が有ります。

個人的には、その認識のない人に闇雲に身分を与えても無意味だと思います。

もし、貴法人が、ポスドク問題に対して、何らかの貢献をしようと思うのであれば、まず、現在、各大学で教官が個人的な裁量によって引き受けているポスドクの現状を調べていただければよいのではないかと思います。学術振興事業団の研究者として、あるいは研究拠点（COE）等の研究者として給料をもらって研究しているポスドクは恵まれ過ぎている方です。彼らは身分を確保するには全く苦労はないので、彼らには何の配慮も必要ありません。本当に身分を維持するのに苦労しているポスドクは、彼らではなく、非常勤講師等による収入で生活しながら、研究を続けている人達です。身分だけでも確保し易くしようという趣旨を踏襲しようと思えば、この人達を念頭に置くべきなのではないかと思います。

また、彼らのケアを本当にしようと思えば、収入源である非常勤講師の斡旋なども法人を通して出来きないでしょうか。現在非常勤講師の仕事は、口コミで情報が得られるということが多いので、これを組織的にすることだけでも出来れば、大学側が非常勤講師を募集したいとき等にも役に立つのではないのでしょうか？予算の獲得が困難かもしれませんが、たとえ、少子化により講義数が減少して、これまでの講義形態では講師数が過剰になっていたとしても、少人数のゼミ形式に授業を多く取り入れることで、必要講師数は増加するのではないかと思います。このことは、各大学に試験的にでも企画していただければ、実現の可能性が見出せるのではないかと思います。

一時的な身分を与えたからといって、ポスドク問題の根本的な解決にはなりません。そのために、若い人の話を十二分に聞いていただける機会をつくる必要があります。そのために、貴法人の「定款」にある市民講座の企画や開催があるのだと私は勝手に認識しております。この企画を通して、「高度かつ豊富な科学知識を持った研究・教育経験者と有能な若い研究者の協力」を図り、若い研究者の能力を発揮する場を与えることが貴法人の目的であると思います。その一方で、現在、科学研究費がある一部の研究機関に集中するようになっています。この科研費の消化のため、現在多くの研究会が企画実行されており、これに加え年に二回の学会があるので、若い研究者が自分の研究を発表する場は幾らでもあるように思います。現在は、これらの機会がたくさんありすぎ、その多くに出られるほど暇な大学の教官の方はいないと思います。このことが、逆に、若い研究者の発表を、大学の教官の方々が目にする機会を減らし、研究者間の交流の欠如を生ん

でいるのではないかと考えられます。これは私の個人的な意見ですが、各大学の教官の方々は、せめて自分の専門分野のセッションだけでも、なるべく学会に足を運ばれ、若い研究者の発表を聞いてもらえないかと思います。各大学の教官の方々が、自分の研究を発表しないにしても、なるべく学会に出席され、現在の最先端の研究を確認すると同時に、若い研究者の発表を聞いていただき、若い研究者が現在どういった問題に取り組んでいるかも知っていただければ幸いと感じます。そうすることで、学会自身の活性化にもつながるのではないかと思います。そして、もし、学会で若い研究者の発表に興味をもたれたら、若い研究者をセミナーに呼んで詳しく話を聴くことが、若い研究者にとっては一番の宣伝活動ではないかと考えます。

少なくとも私の知っている多くのポスドク待遇の人は、かなり優秀で、独自に業績を伸ばしていける実力を持っている人物も多いです。我々の分野では、彼らの研究が最前線を支えていることは言うまでもありません。彼らには、上記のような認識をくどくど説く必要はないと思います。しかし、このことは、研究分野にも依ります。聞くところによると、ある分野では、助手で就職した人でさえ、自分が主導権を取って論文を書くことが出来ないという話を聞きます。ポスドクで人間を雇うことは、我々の分野では研究成果が上がるのが必ず約束されます。それに対し、ある分野では、単に教育の手間が増えるだけで、ポスドクを雇うことに価値を感じないと聞きます。したがって、ポスドク問題を考える場合、分野に伴う研究者のレベルをも考慮しなければなりません。また、以上の私の個人的な意見は、私の狭い視野をもとにした意見であることも否定できません。特に、現在21世紀COEなどの異分野にまたがった研究拠点の設置がなされております。こういった異分野間で足並みをそろえなければならなくなった場合、分野によるポスドクのレベルの相違を考慮するべきで、分野間の現状に対する相互理解を得る必要が有ります。

さて、ポスドク問題の根本的な問題は、恒常的なポストの不足によるものと考えられますが、ここ10年の文部科学省の政策はそれに拍車をかけていると思えてなりません。特に、文部科学省が次々と打ち出す政策には、長期的展望が全く伺えません。むしろ、打ち出された政策が成功とは言えないものであったため、その対応が後手に回って、悪い方向へ向いている様な印象を受けます。さらにならうのであれば、政策がどれだけの成果を挙げてきたのか、本当に教育や学術面で

成功といえるのかと言うことの反省すらないようにも思えます。極論すれば、これまでのこういった失策であったと思われる政策を打ち立てた官僚は責任を取って辞職すべきだと個人的には思います。教育、学術的な分野の成果は10年後、20年後にその成果が現われ、その長期的展望にたった政策を打ち出すべきであるのに、次々と打ち出される政策は単なる小手先の修正案に過ぎず、その対応のため、教育や研究の現場が迷惑を被っていると思えてなりません。このことは、来年度からの国立大学、国立研究所などの独立法人化にも言えます。文部科学省の人件費削減案に端を発した法人化の方針は、同省自身の明確な路線と長期的展望がまったく感じられません。そのため、各大学および研究機関は、その対応に追われ、本来研究教育に割くべき時間を奪われている状況にある。本来文部科学省は、大学や研究機関という教育および研究の現場をサポートすべき立場にあると思います。しかし、この10年の政策を端から見ていると、むしろ教育研究の邪魔をしているように思えます。

例えば、大学院重点化に伴う大学院生の増加は大学院生の質の低下をもたらしているように思えます。大学院生の募集人員の増加により、大学院修士課程に進学することがある意味当たり前のようになり、あまり良く考えずに、周りの友人が進学するからという理由で進学する学生が増えてきました。その中でも、しっかり先を見据え、自分の将来を考えている優秀な学生はいるものです。しかし、その優秀な学生ほど就職を希望し、その学生にその他のあまり将来を考えていない学生が引きずられ、やはり就職をする羽目になります。これは、私が学部生のときに目にした傾向であり、それが今修士の学生で見られます。つまり、このことは、この10年の間に学生の意識やレベルが2年も遅れたことを意味します。この現象のため、大学院生は一掃され、そのほとんどが就職し、研究者として育つ人がほとんど出てこないという現状に陥っています。結局、大学院重点化による大学院生の増加によって研究の現場にもたらされた結果は、学生の意識やレベルの低下に過ぎず、この政策は失策であったと言わざるを得ません。また、欧米に比べ、学位取得者の少ないことを理由に学位をもつ人材をもっと排出する方針が文部科学省から指示され、そのため、学位の安売りする傾向へ向かっている。そのため、ポストクのレベルをも下げることになり、「ポストク問題」に拍車をかけている。また、少子化により、学生数の減少に伴う大学等の対応や、国立大学、国立研究機関の法人化に伴うポストの削減も、ポストク問題を助長する要因

となっている。そのみならず、この法人化の問題のために、研究教育の現場が右往左往し、本来の研究教育の時間が削減されている事態となっています。

このように文部科学省から出される方針は日本の学術レベルを上げるどころか、下げようとしているような政策ばかりを打ち出していると思わざるを得ません。教育研究に対する政策を打ち出すのであれば、より長期的展望にたった政策が望まれます。

#### 中村康二の経歴

私は、名古屋大学富松彰教授の下で、ブラックホールに関する研究で学位をとりました(1996年3月)。その後、研究の拠点を交えるため、東京工業大学細谷暁夫教授の研究室に研究生として在籍し、日本大学で非常勤講師をする傍ら、当時同研究室の石原秀樹助教授と共同研究をしていました(1997年3月まで)。その後、日本原子力研究所に博士研究員として採用され、立木昌氏(東北大名誉教授)伊達宗行(大阪大名誉教授)のもと、超伝導の研究をしていました(1998年3月まで)。しかし、その研究所には若い理論の研究者が皆無で、議論の相手もない状況で、学位を取ってそれほどたっていない専門外の人間が、新たな分野を研究するには過酷なものでした。翌年、慶應義塾大学の助手として採用され、三年間助手として研究を続けてきました(2001年3月まで)。慶応大での任期が厳格なものであったため、そこに留まる事はできず、かつ、そのほかの行き先も無かったため、専門学校で非常勤講師をしながら、慶応や東工大に出入りすることで、研究を続けてきました。4ヵ月後、国立天文台に教務員補佐として採用されることになり、その後2年間天文台で、教務員補佐として研究を続けてきました(2001年8月-2003年7月まで)。この天文台での任期も2年と厳格なものであり、かつその後の行き先も決まらずに身分を失うことになり、その2ヵ月後、総合研究大学院大学の研究生として、天文台に留まることになり、現在に至ります。

#### 2017年の中村康二による追記：

この文章は、2003年に私が書いた文章です。その後は私は、過労のため5年の療養を余儀なくされたり、社会の仕組みをより知ることになったり、自分自身の考え方も当時とは変わっており、現在読み返すと、青臭く、気恥ずかしい気がします。しかし、この文章そのものは、当時は本心で感じていたことを書いた文章だと思いますので、「2003年当時の若造の文章」であることを強調した上で、HP等で公にすることを了承します。